

家族だけがケアの担い手ではない④

「家族の中で起こったことは、家族の中で解決すべき」という価値観が根強い日本の社会において、近年は家族のありようが大きく変容しているにもかかわらず、依然としてこの価値観に支配されつづけているために、大きな苦悩を抱えている現役世代が急増しており、そんな事例を紹介しています。



埼玉県在住、都内の従業員 200 人ほどの会社で経理部門のサブリーダーの職についている S 子さん（48）。これまでコツコツと地道に経理畑一筋で努力を重ね、経理部門のトップは数年ごとに入れ替わっても、実務をすべて掌握している S さんは、この会社の経理部門にとってなくてはならない人材だと自負しています。

プライベートでは、8 年前に離婚を経験し、それ以来シングルマザーとして子育てと仕事を死に物狂いで両立し、高 3 の長男と中 3 の長女の 2 人の子供は受験生です。S さんは、シングルマザーということに負い目を感じており、子供達に経済的なことで迷惑を掛けたくない、十分な教育を受けさせたいという思いが強くあり、それが仕事と育児の両立のモチベーションにもなっています。

そんなとき、神奈川県に住む実家の両親に異変が起きました。父親（80）がまだ初期で見つかった肺ガンの手術をすることになりました。そのことで頻繁に母親（78）と連絡を取っていると、物忘れや理解不足が気になるようになりました。

何事もしっかり段取りをして将来の見通しを立てておきたい S さんは、これからガンの療養をつづける父親と認知症を発症するかもしれない母親の世話、それにかかる経済的負担について思い悩むようになりました。何もはっきりした道筋が描けない、どんなことが起こり得るのか経験したことがないので想像もできない中で、身体的負担、時間的負担、そして経済的負担がどの程度になるのか、仕事や子育てにどのように影響するのか、まだ両親の実際の介護（ケア）は何も始まっていないのに不安でいっぱいになりました。

特に、S さんの父親は個人商店を営んでいたもので、年金収入は国民年金のみ。預貯金はどのくらいの金額なのかは S さんは現時点で把握していませんが、そんなにたくさんあるとは思えません。今後、父親の入院がつづいたり、母親が認知症で自宅での自立した暮らしが困難になったときに必要になる療養費用や介護費用を、両親の収入や預貯金ではまかないきれなくなったら、S さんがその費用を負担しなければならないのかと思うと、その心配で夜も眠れなくなるほど気持ちが落ち込んでしまいました。

S さんの場合、両親の介護（ケア）を理由に離職するという選択肢を取ることは不会でしょう。しかし生真面目な性格の S さんは、特に経済的な不安と仕事と両親の世話の両立に対する不安で、気持ちが不安定な状況となってしまっています。超高齢社会をむかえ、現役世代の負担が増大する今、「家族だけがケアの担い手ではない」という新しい価値観を推進していかなければなりません。

つづく